

研修報告 D班3グループ DAISUKE さん

テーマ1：責任ある情報を公表するための職員の役割を考える

【情報を公表する意義、目的】

① 他大学との差別化

大学が情報を公表する対象は多岐に亘るため、誰が、何を必要としているのかを把握し、そのニーズに応えるため、自分の大学にはどのような特徴があるのかを理解することが重要。

→ 差別化 ※より明確に差別化するため、情報の伝え方も重要。

② 自分の大学の強み・弱みを知り、改善していくため

強みを主張することと同じように、弱みについても積極的に向き合うべきではないか。

→社会が求めているのは「信頼性」。弱みを敢えて社会に公表し、改善に向けて行動する。

【情報公表の現状を知る ～17歳の気持ちになって～】

受験直前期の高校三年生ではなく、高校二年生をターゲットにした情報公表の現状を確認した。受験生による大学選びの傾向として、①興味を持って進んで自ら大学の情報を調べる、②自分の学力に見合ったレベルの大学で妥協する、の2つに大別できるのではないかと仮定した。

「この大学で学びたい」と思わせる情報が必要だが、実際は、情報の陳列をしているだけ。

→大学側が差別化できていないために、②の傾向が生まれる。

【教育情報はどのように作られているか ～高校生に向けた教育情報～】

関係部署で統制を取って作られるが、合意形成という点では意思が統一されていないことが多い。しかし教育情報については、合意形成された、責任あるものでなければ公表できない。

→情報を作成する際に最も重要なことは、教員・職員間で意思統一されることである。

【公表する情報をどう作っていくのか、その情報を保証するには何が必要か】

責任ある情報とは、教員・職員間で意思統一されたものであり、社会が求める「信頼性」に結びつくものである。そうして作られた情報を保証するための職員の役割とは、大学の弱点を把握し、それを改善するよう教員へ働きかけること、また自らが行動していくことである、という結論になった。教員が回避する「弱み」に向き合い、それをいかにチャンスに変えていくかが、職員として為すべきことのポイントである。

テーマ2：学士課程教育の質的転換を図るための職員の役割を考える

【学士課程教育の質的転換はなぜ必要か】

① 社会が求めている能力（社会人基礎力）と、学生の能力にミスマッチが生じているため。→大学の教育自体が意味のないものになっていることを示しているのではないか。

② 教育の質を保証するため。→定量的に教育を評価（見える化）するべき。

③ 世界に開かれた大学として位置づけるため。→グローバル人材育成のため、異文化交流、国際交流を活発化させる必要があるのではないか。

またグループ内で、自ら学ぶ意欲のある学生が減少しており、何となく大学に入ってしまう学生が増加しているのではないか、という意見が出た。しっかりとした自分の考えを持ち、それを人に伝えられる人材を育てるべき。

【学士課程教育の質的転換を行うためにはどのような準備が必要か】

- ・学生自身の考えを引き出すために「双方向」で議論する場を増やす
→現時点ではそのような場は限られている（ゼミなど）。ここで ICT を効果的に使用することも有効ではないか。
- ・教員への情報提供・情報共有を行う
→教員に現状を知ってもらうため、学生、教員それぞれが成績評価できるシステムが必要。
- ・チェック機能
→学生、教員それぞれの成績評価の差が解消されているかを確認することが必要。正しく運用すれば、客観的な単位評価ができるのではないか。

【学士課程教育の質的転換に ICT をどのように活用できるか】

客観的な単位評価をするための方策の例として、以下が挙げられる。

- ・ルーブリック（評価基準表）
 - ・クリッカー（リアルタイムで学生の回答を集計するもの）
- また、授業に対するミスマッチがないよう、履修前や事前学習の際に簡単にシラバスを見ることが出来る「シラバスアプリ」や、必修科目において、強制力のある e ラーニングを導入し、受講することが履修条件である、といったことも可能ではないか。

【学士課程教育の質的転換を進めるにあたり職員の果たす役割は何か】

- ・学士課程教育の質的転換に対し、有効である可能性を持つ ICT についての知識を深め、客観的な単位評価を実現するために、ICT の運用やそのチェックを徹底して行っていく。
 - ・教員へ積極的に提言し、改善を促していく。
- しかし、本当に重要な役割は、社会と学生のミスマッチ、教育の質の低下、学修時間の減少といった現代の問題を教員に認識させ、改革を導くための危機感を持たせること、つまり「**教員の意識改革**」をしていくことである。そのためには、**職員自身も意識改革**をし、教員がやりたがらない隙間の仕事を職員が積極的に請け負っていくべきである。

【学んだこと、業務において活かしていくべきこと】

テーマ 1、2 を通して、①「強みと弱み」、特に「弱み」に向き合いそれを把握し、改善へ向けた行動をとっていくことが重要であること、②そうした行動をとるためには、教員、また職員の意識改革が必要であること、③そして教職員の意思統一を実現し、社会に対して責任ある情報の公表や行動をとっていかねばならないこと、を学んだ。これらを日々の業務において意識し、実践していけるよう努めなければならぬと考える。

以上